

紗理奈とガールズ

ココナツ娘といっしょ

表紙イラスト：トイト
山本沙姫



試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『紗理奈とサリーナ ココナッツ娘といっしょ』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



紗理奈とガリオ

ゴナツツ娘といっしょ

山本沙姫
表紙 / トイト

登場人物紹介

Characters

サリーナ

日本人の父とティリグ王国生まれの母との間に生まれた、良太郎の従妹。良太郎とは幼い頃にあったきりだが、彼に懐いている。

まきまち さりな

巻町紗理奈

良太郎の自宅の隣にある洋菓子屋の娘。身体が弱く、幼馴染みの良太郎に助けられている。色白で黒髪の美しい清楚な少女。

こぐれりょうたろう

小暮良太郎

日本で怠惰な夏休みを過ごす学生。両親が海外旅行に出かけるため、気ままな一人暮らしをするはずが…。

「いいわね、いくら夏休みになったからって、ハメを外して夜更かしとかしちやダメよ。そして朝昼晩、ご飯はちゃんとしたものを食べる。それから、服はちゃんと毎日洗濯して……」

ある快晴の夏の日の午後、大勢の人が行き交う空港の広いロビーに、鋭い口調の小言が響く。

「わつ、わかつてるよ、母さん……」

周囲の反応を気にして恥ずかしげに顔を朱に染める、ボサボサ頭の小柄な少年に向けて。
(もう……なにもこんなところでお説教しなくても……)

眉間に皺を寄せ、黒縁眼鏡の下で目尻を吊り上げつつ大げさな身振り手振りを加えて話し続ける母親は、彼、小暮良太郎がこの世で最も敬愛し、それでいて苦手とする女性だ。学業については特になにも言わないものの、生活態度には厳しい彼女から、彼は毎日のようにお小言を聞かされている。

だが、苦手意識はあるものの、それが自分のことを大切に想っているからだというのはわかっているのです、決して嫌っているわけではない。

とはいえ、大勢の人でゴった返すような場所で聞かされるとなれば、いつも以上に耳が痛かった。

「わかつているなら、ちゃんとこつちを見て聞きなさい。だいたいあなたは、いつもちゃ

んとわたしの話を聞いてないでしょ……」

自分より背の低い息子と視線を合わせようと、気丈な母は身体をクッと曲げて顔を近づける。

「わわわっ！」

思わず後ずさる良太郎。彼が視線を向けられないのは、お説教しているときの厳しい態度の彼女が怖いからだけではなかった。

(いくら南国へ行くからって、その服装はなんとかならなかったのかな……)

母親が着ているのは、胸元が大きく開いたノースリーブの白いワンピース。胸の谷間がしっかりと剥き出されているばかりか、前かがみになった勢いで九十センチオーバーの爆乳がブルンと揺れるとあつては、いかに実の息子でも目のやり場に困ってしまう。

何しろ、友人たちから「俺、お前の母さんとなら付き合えるよ」などと本気ともジョークとも区別がつきにくいことを言われるほどの若々しい美貌と、海外のスーパーモデルにも引けを取らない凹凸のはつきりしたナイスボディの持ち主なのだから無理もない。

「また目をそらす！　そういう態度は……」

「そのぐらいでよしなさい美枝みえ。良太郎はもう子供じゃないんだから、一週間ぐらい一人でちゃんと留守番できるよ。お隣さんにもお願いしてあるし……」

さらに続きそうなお小言を、ピンテージ物のアロハシャツを粋に着こなす、小柄ながら

もガッチリとした体格をした髭面の中年男性が遮った。

良太郎の父、恭一きょういちである。

彼は美枝と違い、息子の行動については寛大で、自由奔放にさせるほうがよいと考えているため、ついしつけに厳しくなりがちな妻を止めるブレーキ役にもなっていた。

(……助かったよ、父さん……)

どうにかお説教の嵐から抜けられそうで、良太郎はホッと胸を撫で下ろす。

「だって、恭一くん。良太郎ちゃん一人を残して南の島へ旅行するなんて、もう心配で心配で……」

すると夫の忠告を聞くやいなや、息子の生活態度に厳しい母は一変して愛しい旦那様に甘える可愛らしい人妻となり、ネコなで声で話しかけながら彼の右腕にギョツとしがみつ

く。
厳しい態度は、子離れできない優しさの裏返しでもあったのだ。

「はっはっはっ、心配性だなあ美枝は」

人目も憚らずベッタリ寄り添ってくる妻に驚きもせず、恭一は彼女の頭を優しく撫でる。未だ名前で呼びあう父と母は、まるで新婚夫婦のように日々所かまわずアツアツぶりを見せていた。

(そんなに心配なら、一緒に行こうか?)

一言言いたくなるのを、孝行息子はグツと堪える。楽しい父と母に、余計なジョークで水を差すのは気が引けたから。

とはいえ、どうしても確認したいことがある。

「……二人とも、何しに行くのか忘れてないよね？」

度を超えた両親のイチャつきぶりに、呆れたように溜め息をついて腕を組むと、良太郎は少々皮肉混じりの口ぶりで話しかけた。

「もう、わかってるわよ、良太郎ちゃん」

「ちゃんとサリーナを連れてくるから、お前はしっかりと準備して待っているんだぞ」

二人が大切な息子一人を残して旅に出るのは、新婚旅行気分のバカンスのためではない。日本に留学することになった弟夫婦の娘、すなわち良太郎にとっての従妹を迎えに行くのが、本来の目的である。

（ほんとにわかってるのかな……）

とはいえ、両親のラフな服装と妙に浮かれた口調の答えから、ついでに常夏の島の休日を満喫してこようと考えているのは一目瞭然。

そして留守を任された良太郎には、来日する従妹が暮らすための部屋をかたづけしておくという、大切な役目があった。

「間もなく、ティリグ行き第七便の搭乗手続きを開始いたします。ご搭乗されますお客様

は……」

「では行ってくる。だがな、良太郎。出発前に、これだけは言っておく……」
やがて二人が乗る機の搭乗案内が流れると、恭一は今までに見せたことのない真剣な面持ちで、グッと身を乗り出し呼びかける。

「な、なに……父さん……」

「……紗理奈ちゃんとハメる……いや、ハメを外すのだけは許す。いい機会だから思いつきり仲を深めるがいい。先方のご両親もそうお望みであろう」

気迫に満ちた態度に氣後れして、思わず顔を引き攣らせる息子の華奢な両肩をパンと叩き、アロハ姿の浮かれた親父は突拍子もないことを告げた。

「ちよっ、なっ、なななななんてこと言うんだよ、父さんってば！」

突然、お隣の幼馴染みとの初体験を薦められて、生真面目少年は両手をバタバタと振って慌てふためく。

「そうね、良太郎ちゃんは奥手だから、この際一気に攻めに回るのもいいわ。あ、でもまだ生はダメよ。ゴムぐらいいはちゃんと自分で用意しなさい」

生活態度には厳しくても、なぜかHに關しては妙に寛大な母が胸元で握り拳を合わせ、ガールズトークに花を咲かせる女子校生のようにウキウキした態度でさらなる追い打ちをかけてきた。

「買いに行くときは、なるべく近くの薬局は避けるんだぞ良太郎」

「そうそう、ご近所さんに見つかつたら大変だからね……」

「……ほらほら、さつさと行かないと、乗り遅れちゃうよ……」

人目も気にせず、余計な話を続ける両親の後ろへ素早く回り込むと、華奢な少年は両腕に渾身の力を込めて、二人の背中を出国カウンターへ向けて押していった。

（さて……しばらくはのんびりできそうだし、何しようかな……）

父と母を乗せた飛行機が無事に飛び立ったのを見届けると、良太郎は急ぎ足で空港ターミナル駅へと向かう。年頃の男の子だけに、親に邪魔されずにしたいたいは色々ある。時間を無駄にはできない。

（そうだ、達之たつゆきがなんか新しいエロゲー買ったって言ってたっけ。もう終わってるなら貸してもらおう）

不意に、友人が夏休み前に言っていた羨ましいことを思い出し、連絡を取ろうとジーンズのポケットから取り出した携帯電話を開く。

「あ……」

しかし、待ち受け画面を目にすると、キーを押そうとした親指がピタリと止まった。

「……あれからもう十年か。どんな子になっているんだろう……」

液晶に映されたのは、砂で作ったお城の前でVサインを出して無邪気に笑う、色白で華奢な男の子とココナッツの実を髷髻とさせる明るく茶褐色の肌の小柄な女の子。

幼い頃、両親に連れられて訪れた南の島で叔父に撮ってもらった、自分と従妹のサリーナの写真。それを見た途端、頭の中に懐かしい光景が次々とよみがえってくる。

サファイアブルーの波が絶え間なく打ち寄せる、白く広い砂浜で、短い間ながらも毎日朝から暗くなるまで遊んだ日々。傍らにはいつも、赤みがかった瞳の元気な少女がいた。

『リョータロー。おはヨー』

『見て見てリョータロー。ほら、きれいなお花……』

『リョータローだーいすき』

日本人の父と熱帯の島国、テイリグ王国生まれの母との間に生まれた従妹は、一つ年下の甘えん坊。父に習った日本語で、カタコトながらもしきりに話しかけて懐いてきたのが、一人っ子の良太郎には可愛い妹ができたようで嬉しかった。

（日本語、うまくなったかな？ 前よりいろんなことが話せるといいけど……）

浜辺を駆け回ったり、砂遊びをしたり。海に潜って、きらびやかなサンゴの林の中を泳ぐ熱帯魚の美しさに感動したりもした、南の島での体験はかけがえのない宝物。

頭の中を駆け廻る思い出が、浮かれた少年の心を動かす。

（……エロゲー借りるのなんて、サリーナの部屋をかたづけからで十分だ……）

る欲望を一気に燃え上がらせる。

「ぼ、僕も……キミと、その……したい、けど……」

とうとう堪えきれず、彼はカラカラの喉を震わせ、かすれた声で想いを打ち明けた。とはいえ、そこは妄想かモニターでしか男女の営みを知らないウブな男の子。自分からはどうしていいかわからない。

「大丈夫。ママがパパにしてあげてること、こっそり見て研究したからアタシに任せるネ」
「ええっ、ちよっつ、ちよっつと……」

ジーツツツ……。

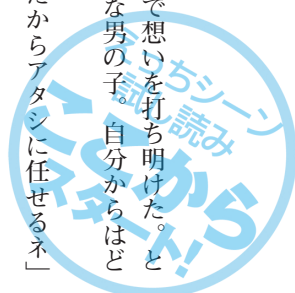
戸惑う童貞少年に、年下の従妹はまるでいたいけな少年を誘ういけないお姉さんのごとき余裕の口ぶりで告げると腰を下ろし、彼のジーンズのファスナーを開き、中ではち切れんばかりに膨らむ一物を引きずり出す。

「！ もっ、もう……こんなになつてル……」

両親のセックスを盗み見ていたというわりには、赤黒く変色して幾本もの青筋を浮き立たせ、ビクビクと痙攣する男根を目の当たりにしたサリーナの端正な顔は、明らかに引き攣っていた。

「……怖い、の？」

「そっ、そんなことないモン。アタシ、リョータローのお嫁さんになるんだから、平気だ



モン」

思わず問いかける良太郎に微妙に震えた金切り声を上げると、一糸纏わぬ常夏娘は愛しい人の訪れを待ちわびて震える秘園へ、火照った雄蕊をあてがう。

「あっ！」

ところが、粘液を纏った亀頭の先端が秘部に触れた瞬間、汗にまみれた茶褐色の肉体がビクツと痙攣した。

(……震えてる……そりややっぱり、怖いんだろうな……)

はじめての時に、女の子には身を裂かれるかと思うほどの痛みが股間に走ると聞く。まだ精神的に幼さの残る彼女が、恐れを抱かないはずがない。

「……やっぱり、やめよう。勢いですることじゃないよ……」

優しく諭すような口調で語りかけると、横たわる小柄な少年は身を振り、彼女の股の間から這い出そうとする。だが、サリーナは膝頭に力を込めて、彼のウエストをキュツと挟み込んで動きを封じた。

「ええっ!？」

「リョータロー。ホントにやさしいネ。だから、大好き。やっぱり、リョータローと、結ばれないネ……アタシ……」

目尻から零れ落ちそうになった涙を指先でぬぐい、健気に微笑んで告げると、サリーナ

はさらに深く腰を下ろす。

ぐちっ！

「うっ！」

カチカチに固まった亀頭が乙女の秘園を貫いた瞬間、強烈な締めつけと熱さが、敏感な肉柱の中を稲妻のごとく駆け抜ける。下腹部が一気に火照り、早くも肉欲の証をぶちまけてしまいそう。

「はうんッ！　り、リョータローのオチン、チン……アタシの中に……入ったネ……あうんッ！」

一方でサリーナは、女体の最も敏感な部位に走る痛みを耐えつつ、少しずつ膝を曲げて愛しい人のいきり立った分身を体内へ送り込んでいく。生暖かい処女の証を滴らせながら。「ごっ、ごめんサリーナ……痛かった？」

己が一物を濡らす鮮血を目にして、心優しい少年は思わず上擦った声で問いかける。

「平気よ、リョータロー。アタシ、リョータローと、もつともつと深く、強く、結ばれたいネ。だから、大丈夫……」

微かに頬を引き攣らせつつも、健気にウインクして答えるとサリーナはパンパンに膨れた肉柱を根元まで肉花の奥底へ押し込む。そしてゆっくりと腰を引き、抜ける直前まで引き出していく。

「あはうんッ！」

亀頭のエラが秘唇から抜け出るギリギリまで来ると、再び腰を下ろしていった。ゆつたりとした動きの、愛欲のピストン運動のはじまりだ。

ぐちやつぐちやつぐちゆつぐちゆつ……。

(こ、これが……サリーナの中……)

男の最も敏感な部位を包み込む、熱き粘液を纏った乙女の陰花。妄想では感じたことがない、魂まで絞り出されるかと錯覚するほどの強烈な締めつけがもたらす、痺れるような刺激が肉棒の皮下へジワジワと染み込んでいく。火照った肉壁で、優しく撫でまわされる心地よさとともに。

「あうんッ！　り、リョータローの……オチン、チン、固くて……太くて、はいんッ！　すつ、すごいのッ！」

「サリーナだって、んくつ、すごく、締まってて、うつ、ぬるっとしてて……気持ち、いいよっ！」

互いに興奮を抑えきれず、二人は相手の秘部がもたらす快感を口にしつつ、徐々に動きを速めていく。

ぐしゅつぐじゅつずぶつずぶつ……。

(すごい、サリーナのおっぱい、あんなにプルプルして……)

紅色の蕾を頂いたココナッツ色の乳房が目の前で波打ち、多感な少年を引き寄せる。しかし寝そべっている状態では、身を起こして腰を振る彼女の上半身に手が届かない。

「はあんっ、あんっ、リツリョータロー……んっ、こっ、今度は……リョータローが、んっ、上に、なつて……アタシのこと、はうんっ、いつ、いつぱい……ぐりぐり、してえっ！」

すると彼の胸の内を察したのか、サリーナはコロンと横たわり、体位を入れ替える。

「ふぐっ……どっ、どうすれば……」

ココナッツ色の艶めかしい女体に覆いかぶさり、双乳の谷間に顔を突っ込んだ良太郎は、鼻腔に広がる乙女の甘い体臭にますます興奮し、鼻を鳴らしながら問いかける

「パパつて、ママと日すル時、いつもお尻を前に突き出したり、振り回してたりしてたネ。そしたら、ママいつも気持ちいいって言つてタ……」

荒い息を吐きつつ、秘め事の知識では一步先んじるトロピカル娘は興奮気味に弾んだ口調で答えた。

「こっ、これで……いいの？」

むぎゅっ！

びちゅっびちゅっぶちゅっずぶびゅっ……。

両手で目の前の巨乳を、指が食い込むほど強く鷲掴みにして身体を支えると、良太郎は腰に力を込めて振りはじめ。手の中いっばいに広がる湿った褐色の肌の柔らかさと熱さ、

それに激しく脈打つ胸の鼓動の、トクトクという心地いい振動を感じながら。

（サリーナのおっぱい、すごく、柔らかくて……気持ち、いい……）

手の平から伝わってくる心地よさをより一層味わいたい想いがつのり、良太郎は五指に力を込めてグニグニと蠢かせる。

クリュッ！

「はひいんッ！　そこ、クニクニされるの……いいッ！」

さらに、固く尖った乳首を指で挟めば、豊乳の中に落雷のごとき刺激を受けたココナツ嬢の肉体が、床から背中が浮くほど強く跳ね上がる。

「はうっ！」

途端に、膣口に詰め込んだ一物を突き上げる強烈な刺激が走り、一瞬爆発しかけてしまう。
「くうううっ……まっ、まだ……」

しかし、少しでも長く彼女の肉壺の感触を味わいたくて、咄嗟に男根の根元に力を込めて射精を封じ、言われるままに尻で円を描くように腰を振り回し、ココナツ嬢のヴァギナの中を蹂躪した己が分身を振り回す。

「そっ、そおっ！　もつともつと、オチン……チンあんっ！　アタシの、ここの中、でっ、あうんっ、グルグル、回してえんっ！　アタシもっ、頑張るからッ！」

するとサリーナもまた、愛する人をより強く深く気持ちよくさせたい一心で、両足を踏

荒い息をつきながら抑えのきかなくなった良太郎は無遠慮に覆いかぶさった。

「い、いくよ……紗理奈ちゃん……」

海水パンツの前を開き、ビクビクと脈打つ肉槍の先端を、愛しい人の雄蕊を待ちわび震える肉薔薇の中心にあてがう。

「えっ、あ……」

ところが、いざそのときになると、彼女はサツと腰を引いてしまう。やはり、熱く膨らんだ肉柱を己が秘唇の中へ収めるのは怖いらしい。

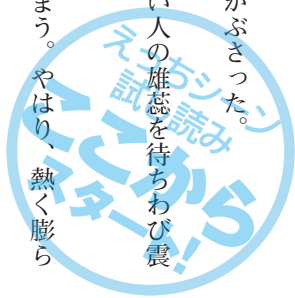
「あ……ご。ごめんなさい良ちゃん。わたし、良ちゃんと、その……したいのに、逃げちやつて……」

自分から大好きな人を誘っていないながら逆におあずけをさせてしまって、気弱な色白娘は胸元で拝むように手を合わせて詫びる。健気な仕草が可愛らしくて、なんとかして彼女を怖がらせずに結ばれたい理想が、生真面目少年の胸の奥に芽生えてきた。

（いったいどうすれば、紗理奈ちゃんに負担をかけずに……あ、そうだ！ 確か、こんなシチュエーションが前にやったゲームに……）

「ねえ、紗理奈ちゃん。その……四つん這いになって、くれないかな……」

頭の中に、以前にモニターで見た光景がひらめくと、良太郎は恥ずかしげに曇った声でお願いする。かつてプレイしたエロゲーにあった、海辺での初Hシーン。いきり立つペニ



スに恐れを抱くヒロインと、後背位でなんとかうまくいったというものだった。

「ええっ！　そ、そんなかつこうで、するの？　恥ずかしいよう……」

さすがにうら若き乙女が、大きなお尻を好きな男の子の前に突き出すなど気が引けて当然。柔らかな頬を火が着いたように赤く染めて、たどたどしく断ってくる。

「でも、後ろからなら、その……僕のこれ、見なくて済むから怖くないと思うんだけど……」

しかしこのままでは埒が明かない気がして、良太郎はなんとか説得を試みてみた。無論、それがエロゲーで見て得た知識だとは言えるはずがない。

「……そ、それもそうね。でも、その……あんまり、お尻……見ないでよね。わたし、これでも気にしてるんだから……大きいの……」

すると、彼女も正常位で結ばれる自信がないと判断してか、恥ずかしげにたどたどしく答えると、ビニールシートの上に四肢をつき、大きな桃尻を高く掲げた。

「こっ、これで……いいの？」

「あ、う、うん……」

湿った紺色のスクール水着の尻布が、ピッタリと貼りついたヒップを目の当たりにして、愛欲を滾らせた思春期少年の心はますますヒートアップ。

「い、いくよ……紗理奈……ちゃん……」

上擦った声で呼びかけると、柔らかなでん部を両手で鷲掴みにする。そして股布の隙間

から、縦一文字に走る乙女の秘割れ目指して、熱く火照った肉槍の先端を滑り込ませた。

「んっ……」

くちゅっ！

そして、彼女に負担をかけないように少しずつ腰を突き出し、柔らかな肉の洞窟を押し進んでいく。

「あっ、あんっ！」

はじめての男根を受け入れた瞬間、汗まみれの背筋がビクッと跳ね上がる。しかし艶やかな喘ぎ声には、破瓜の痛みに苦しむ様子は感じられない。

「さ、紗理奈ちゃんの……ここ、すごく柔らかくて……なんだか、優しい感じ……」

サリーナの引き締まった肉体に比べると、ポツチャリした紗理奈は膣口や産道も柔らかいのか痛みをあまり感じていないらしい。

良太郎も、己が分身に強い締めつけは感じないものの、湯煎した生クリームをかき回すような、熱くペタペタと纏わりつく感触が心地いい。

「良ちゃん……わっ、わたしのこども、サリーナさんみたいに、いっぱいかき回して……はっ、早くう……」

色白娘の柔らかい膣内の感触の心地よさに酔い、思わず動きを止めていると不意に艶めかしいおねだり声で、紗理奈が呼びかけてくる。気にしていると言っていた、大きなヒッ

プを左右に揺らしながら。

「あつ、うん……えーつと……」

彼女に言われるまま、昨夜の従妹との秘め事を思い出しつつ良太郎は腰を動かしはじめる。

ぬぶつぬぶつぬぶつぬぶつ……。

（こんな感じかな。でも、紗理奈ちゃん……身体が柔らかいから、強くしてあげないと、感じないかも……）

腰を前後にスライドさせつつ、尻を「の」の字を描くように振り回し、カチカチにいきり立った肉雄蕊で乙女の花園をかき回す。

ぶじゅつじゅるつじゅるつ……。

「あつ、あうんっ！ りっ、良ちゃん……つつ、強すぎるよう……」

水着の胸元を引き裂いて飛び出してしまいかねないぐらい、激しく豊乳が揺れ動くほど強く激しく、良太郎はふくよかな幼馴染みの肉壺の中を突きまくる。時には素早く腰を前後に振り、また時には膝を屈伸させて上下運動を加えながらなど、突き方に変化をつけて。「くうっ、すっ、すごい……紗理奈ちゃんのとて……ものすごく、ぬるぬるべたべたしてて、なんか厭らしい……もうっ、でっ、出そう……」

柔らかく熱い肉壁は、思いのほか強烈な刺激を膨れ上がったペニスに染み込ませ、限界

の時を刻々と早めていく。

ぐにゅっぐじゅっぐじゅ。っじゅぐじゅぐつつつ……。

「あつ、まつ、まつて良ちゃん……やっぱり、さつ、最後は……良ちゃんと、ちゃんと向かい合つて、したいの……あんっ！」

カチカチに膨らんだ男のモノを目の当たりにする恐怖を懸命に振り捨てて、紗理奈は甘つつたるい声でおねだりしてきた。

「いつ、いいよ。キミが、そうしたいなら……うっ！」

汗ばむ喉を反らし、上擦った声で告げると良太郎は秘所をつなぎ合わせたまま、全身汗まみれの色白娘の太腿をがっちりと掴み、そのまま器用に仰向けに寝転がす。

ぐるりゆりゆつつつ……。

「はうっ！」

敏感な一物に捻るような刺激が走り、肉の巨砲の引き金を引きかけた。

「やつ、やだ……もつと、もつとかき回して……もつと、良ちゃんの……オチン、チン……感じていたいのに！ もつと繋がっていたいの……あんっ！」

膣内を蠢く肉雄蕊が、小刻みに痙攣しているのを感じ取り受精の時が近いのを悟る紗理奈。しかし少しでもその瞬間を伸ばし、快感を味わっていたい想いでムチムチと張りのある太腿を閉ざし、膣圧を上げて中のペニスを抑え込む。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>